



R - 3



夢幻世界の難事件

芳田尚哉

.....。

.....。

.....。

『.....さん』

あれ？ いつもと違う。

『.....いさん』

闇じゃない。声が聞こえる。

『.....兄さん』

あ、この声は.....居酒屋で働くお姫様でもなく、白い帽子と長い黒髪が印象的な方向音痴の通称 `おてんこ、でもなく.....にやむにやむな万年微熱少女ではないかっ！

『兄さん、いつまで寝てるんですか。いい加減、起きて下さい』

はっ.....これは現実なのか？ いや、夢に決まっている。現実にいるはずがない。いたとしても.....そんな.....そんな馬鹿な事があるはずがない。

「うわっ！」

俺は慌てて目を開けた。

.....と、そこには信じられないものがあつた。

「あ、起きちゃった」

目の前には本が.....ああ、帯に `妹に落としてもらえば目覚まし代わりに、とか書かれている音楽記号の公式ビジュアルファンブックじゃねえか！

って、それはそれとして、どうしてお前が持っている！ 歩.....。

って、んな事を悠長に考えている場合じゃない。それは既に歩の手を.....。

――ゴッ！

.....。

.....。

.....。

ねえ、これじゃ目覚ましにならないっすよ。きっと、永眠も不可能じゃないかと.....。

「ああ～お兄ちゃん.....」

ああ、歩の声が遠ざかっていく。

.....くたっ！

〈次回への道標〉

タイトルが変わったようですね。という事で、このお役目を仰せつかりました新見敬子です。よろしくお願ひします。とにかく、原稿を渡されましたので、読みたいと思います。

その日はいつもと違った。それはいつもとは違う日の始まりを意味する。そして、かつてない

展開が.....。

次【事件の朝】

全ては平凡な日常から始まる。

はぁ.....初めてで緊張しましたが、なんとか読めました。これからも頑張りますのでよろしく
お願いします。

「ったく……散々な朝だ」

頭を押さえながら通学路を歩いている。コブになってないだろうな……。

「文句言わない。全部、お兄ちゃんが悪い。故に、なにが起ころうともお兄ちゃんのせい。どう一ゆーあんだーすたんど？」

「わーったよ」

ったく……なんつう妹だ。

「おはようございます、不動さん、歩さん」

車道から声がした。まあ、確認するまでもないな。

「レイファさん、おはようございます」

そこには黒塗りのベンツ……いや、黒のメルセデスが走っていた。しかも、俺たちの歩く速度に合わせるように徐行している。

「おはよう、レイファ」

ったく……歩が遅刻を恐れて早めに起こすようになったから、毎日のようにレイファと会う。そのせいか、レイファは最近ご機嫌だ。

「グッド・モーニング諸君」

「おはようございます、渡瀬さん」

「おはよう、不動妹」

爽やかに微笑みながら手を振る渡瀬。

「渡瀬、その爽やかな笑みをやめろ」

「なにを言う。この爽やかな朝に爽やかにしないヤツは愚かだ。爽やかな笑顔は標準装備じゃないか」

……………謎だ。こいつはどこかの宇宙と交信しているのだろうか？ にはしてはアンテナがないが……。もしや、見えない場所に触角が……？ ……いや、考えない事にしよう。

「わかった。とにかく、学校に行こうか」

それだけ言って、俺はさっさと歩き出した。

「待ってよ、お兄ちゃん」

慌ててついてくる歩。

「そうですわね、遅刻はわたくしとしては駄目ですわね」

「待て、不動！」

こうして、俺たちは揃って学校へ向かった。そこに事件が待っているとも知らず。

〈次回への道標〉

今回も担当させていただきます、新見敬子です。少しフリートークの時間を頂きましたのでお喋りさせていただきます。よく考えれば、私のフルネームが出たのはこれが初めてなんですね。初期から

きちんと設定されていたのに、今まで書かれていませんでしたのね。さて、そろそろ原稿を読まないといけないようですので、読みたいと思います。

何気ない普通と呼ばれる日常。それこそが平凡とはかけ離れた現実の証。そこで起こる凄惨な事件。それは……。

次【教室にて】

全てはそこから始まる。

なんとか今回もそつなく読めましたわ。

ってなわけで、四人揃って校門をくぐる。なんとも妙な関係になってしまったようだ。だが、これが当たり前になってしまったので、歩の目覚ましが無いのと同じくらい、これがないと逆に変な気分になってしまうというのもおかしなものだ。

「じゃあな、歩」

「また、お昼休みですわね、歩さん」

「ではだ。不動妹よ」

「うん、またお昼休みに」

学年が違う歩とは別れて、俺たちは教室に向かう。

「最近はめっきり冷えてきましたわね」

「そうだな」

レイファとの何気ない会話。

「だが、お前たちは熱々なんだろ」

そんな俺たちを茶化す渡瀬。

――ボフッ！

「……あがっ！」

腹を押さえてうずくまる渡瀬。馬鹿め。

「どうしましたの、渡瀬さん」

「ああ、あいつはなんでもないさ。ただ、今朝から腹の調子が悪いそうだ。ついでに、おつむの調子も悪いみたいだぞ」

「そうなんですか……大変ですわね」

渡瀬、馬鹿な事をほざくからそういう目に遭うのだ。学習しろ。

「ふ、ふどお……」

「なんだ、渡瀬」

「ナイスパンチ……まさに、グッジョブ！」

親指をビシッと立てる。

「おはようございます」

挨拶をしながらレイファが教室に入る。それに続いて俺も入る。渡瀬は廊下で休むとか言って一緒に入らない。まあ、こいつのたくらみはなんとなくわかる。既成事実を作ってしまったマイライフの実現を目論んでいるのだろう。

その時、教室から冷たい視線を受けたような気がした。

〈次回への道標〉

お嬢様の学園生活ってこんな感じなのですわね。私は学園までは行った事がないので、よくわかりませんが……。草加さんから話を聞くくらいでしたから。では、渡されました

原稿を読みましょう。

謎の視線の正体。気になりつつも気のせいかもしれないと思うようになる。しかし、これが事件の始まりであった。

次【視線の主】

それが運命の転換期。

なんだかシリアスな内容ですわね。

さっき、なんだか妙に冷たい視線を感じただけだな……気のせいかな？

まあ、別に恨まれるような事をした覚えはないからな……。まあ、恨みなんてのは、本人の自覚がない間にされていると云うしな。

まあ、気にしないでおこう。それがいい。

「どうかしましたの、不動さん」

「いいや、なんでもないさ」

笑顔で返す。まあ、レイファに言ったら大袈裟になるからな。

「そうですか」

最近、笑顔で会話を進めているな……なんだか、少し前までなら考えられない。

それもこれも、マッドサイエンティストが発端なんだよな……そう思うとなんだかな……。イヤな気分だ。

「よう、そこのラヴってるお二人さん」

回復した渡瀬が教室に入ってくるなり叫ぶ。馬鹿野郎だ。

「やあ、渡瀬く～ん。お花畑のお姉さんとの面会をお望みかな？」

「今回は遠慮させてもらうぞ、不動」

そう言って俺の肩に手を回し、耳打ちする。

「なあ、不動。お前まだ言ってないのか？」

「なにをだ？」

「俺は……の後だよ。まあ、現在の状況を見れば言葉なぞいらぬという感じではあるが、やはり言葉にしてもらうのは嬉しいんじゃないか？ レディーとしては、口には出さないものの、言ってもらえるのは嬉しいもののはずだ」

「……………お前は逝くか？」

「まあ、落ち着け。確かに、マイライフ実現という俺の目論見がないと言えは嘘だ。だが、俺がそんな事をせずとも、お前たちは十二分にいい雰囲気ではないか」

「お前が多少演出しているがな」

「そろそろHRが始まるんだけどな」

そんな俺たちの会話を委員長が邪魔する。ちょっと有り難い。

「ああ、悪い、委員長」

「いい加減、席に着いたらどうかな」

〈次回への道標〉

おや？ どうやら最後に出てきた方は初登場のようですわね。どうなるのでしょうか。とにかく、早く続きが知りたいので原稿を読ませて頂きます。

視線の主と不動和己そして、レイファのラヴトライアングル。それが意外な展開へと

いく。

次【恋愛の王道】

そして、急展開。

なんだか、すごい事になりそうですわね、お嬢様。頑張ってください。

「悪いな、委員長。ほれ、席に戻るぞ、不動」

「ああ」

って、ここ俺の席じゃん。

「ごめんな、委員長」

「わかってくれればいいんだ。だが、君たちはあまりにも風紀を乱しすぎる。協調性というものを親から学ばなかったのかい？ 本当に君たちは哀れだよ」

うっわー、ひどい言われようだ。ちょっと騒いでいただけなんだがな……。まあ、こいつはこんなヤツだし、しゃーないけど。

騒いでいたこっちが悪いんだし。だけど、ひどい言い種だ。

「沢田さん、それは言い過ぎではありませんか？」

「紫藤さん……」

突然の抗議に委員長は絶句した。

「レイファ……」

その声には俺も驚いた。

「レイファ、そこまで言わなくてもさ……ほら、騒いでた俺たちが悪いんだし……」

なだめようとするが、

「そんな事ありませんわ。明らかに沢田さんの暴言です。なにも、あそこまで言う事はありませんわ。普通に注意するならまだしも、あれは人として最低の言葉です。自分は神様だとでも仰りたいのですか？」

「……………」

言い返せない委員長。っていうか、これに言い返そうなんて無理だろ。

「申し訳ない」

それが委員長から発せられた言葉だった。

「確かに、紫藤さんの言うとおりのだ。あれは暴言だった。不動君、ごめん」

「あ、ああ。俺は別にいいんだけどさ……」

「さすがレイファだな。愛する者のためにあそこまで弁論できるとは……さすがだ。よかったな、不動。貴様はこれほどまでにレイファに愛されているのだ。ったく、羨ましいな、おい」

〈次回への道標〉

さすがですわ、レイファお嬢様。愛する殿方のために、ここまでできるのですね。お仕えする者として嬉しゅうございます。それでは、この嬉しい気持ちのまま原稿を読みますね。

嬉し恥ずかしピュア・ラヴ。しかし、そこには嫉みもつきもの。それが恋を滅ぼそうと忍び寄る。

次【迫り来る崩壊の足音】

それは心の光と闇。

.....嬉しい気分で読みましたのに、すごく怖そうな内容ですね。

……渡瀬の発言が耳に残った。

『貴様はこれほどまでにレイファに愛されているのだ』

愛されている……なんだろうね、この純粹故に恥ずかしい単語は。

『これほどまでに愛されているのだ』

『愛されているのだ』

『愛されている』

『愛されて……』

なんという甘美な響き。しかし、同時に頬が紅潮していくのが手に取るようにわかる。ほれ、耳まで真っ赤になってきた気がする。気のせいじゃない。そう、妖精なんかじゃない。そんな事言うのはよせやい……。

はあ～～～。

なんとか心が落ち着いた。

とっとと席に着こう。

なんだか、レイファの顔がまともに見れないじゃんかよ。

ああ、俺って弱いな。ああ、弱い。弱いとも。弱者だよ。

「不動さん、大丈夫でしたか？」

レイファから声が掛けられる。

「あ、ああ、大丈夫だ」

どうしてこんなに胸がドキドキするんだろう？

そうだ。あんな事を聞いたからだ。渡瀬だ。渡瀬が悪い。あいつがあんな事さえ言わなければ、俺のハートがこんなときめく事はなかったんだ。

ってなわけで、放課後――

今日は緊張して一日を過ごした気がする。

「不動君。さっきは邪魔が入ったけど、やはり規則は守ってもらわないと困るんだよね。紫藤さんが言う事ももっともなんだけど、やっぱり自分の意見は否定できないな」

突然、委員長から声を掛けられた。つうか、すでに語られている。

「聞いているのかい、不動君」

〈次回への道標〉

不動様、大変な事になってますわね。嫉妬なのでしょうか、彼は。あっ、申し訳ありません、ネタばれのような事を言ってしまいました。どうか、お許し下さいませ。では、原稿を読ませていただきます。

謎の事件。容疑者は四人。捜査するは四人。謎が謎を呼び、真犯人は姿を現さない。完全に消える真犯人。さあ、四人の若き探偵よ、真犯人を見つけるのだ。

次【探偵団結成！】

謎が彼らを呼ぶ。

すごいですわね。これはミステリーなのですね。

「もう、いいでしょう」

間に入ってくるレイファ。

「ですが、紫藤さん……」

「問答無用です」

じっとすごい視線で委員長を睨む。

「……………」

すごすごと下がっていく委員長。

「レイファ……」

「不動さん、気にする事はありませんわ。彼はああいう人ですから。規則に縛られた、そして縛られなければ生きていけない人です。もっと心を広く持って柔軟性がありませんと、あなたのように」

と、ウツリとした視線が……。

「では、帰りましょうか」

「……そうだな」

なし崩しに一緒に帰る事となった。で、教室を出たその時、

「キャーッ！」

なんだ、悲鳴が。

まさか、また生きた化石か？

「ジョニーですか？」

……二進法喫茶での呼び方ね。わかった？

「とにかく、行ってみよう」

俺たちは声の方へ走った。

「どうしたんだ？」

そこに何故か渡瀬がいたので、ヤツに訊く。

「ああ、大変な事になった。これは名探偵が必要だ。そうだ、探偵団を結成しよう！」

はあ？ わからん。とにかく、みんなが見ている視線の先を見た。

「うっ……」

思わず嘔吐しそうになった。

そこには、赤黒い水たまりが。その上に横たわる学生服。

「渡瀬……」

「ああ、委員長だ。おそらく助からないだろう」

「殺人か、自殺か……」

「それを調査するためにも探偵団結成だ！」

〈次回予告〉

すごい展開のようですが、筆者さん曰く、当初の構想ではこれを一番最初にしたかったそうです。なので、やっと出発点のようですわ。では、心して原稿を。

結成された探偵団。そこに集いし若き頭脳。若き探偵たちは事件を解決できるのか。

次【結成そしてファースト・ケース初事件】

そこに探偵団ある限り。

楽しみですわ。

Ok 【結成そしてファースト・ケース初事件】

なんだかんだで、俺たちは急遽集結した。

まあ、いつものメンツだ。

俺――不動和己と妹の歩。そして、レイファに渡瀬章一郎。でもって、渡瀬の提案で科学捜査担当としてマッドサイエンティスト櫻井も参加する事と相成った。

ちなみに、櫻井は夏休みは原因不明の病に悩まされたらしく、夏休みが明けてやっと退院できて、はいずりながらも研究室（プレハブ小屋）に通い詰めているらしい。というか、移動する元気もなく、そこで寝泊まりしているようだ。

『生きてたのね、櫻井さん』

そう言った歩は、本当に残念そうだった。

とにかく、当初からを含めたフルメンバーで探偵団は結成された。しかし、櫻井はその症状のため随時行動を共にする事はできないので、実質四人という事になる。

「さて、今回の事件を振り返ってみよう」

急遽用意されたホワイトボードの前に立った渡瀬が口を開く。

「これを殺人だとする場合、委員長を恨む者がいたはずだ。これに該当する者を書き出してみるとこうなる……」

そう言って、ホワイトボードに見覚えのある名前を書いていく。

`不動和己、

`紫藤麗華、

`渡瀬章一郎、

`不動歩、

って、ここにいるメンバーじゃん。

「以上だが、誰が犯人なのか」

「って渡瀬さ、容疑者ってこれだけ？」

「そうだ。あの事件の直前に委員長を殺す動機があるのがこの四人だ。そう、我々は探偵でありながら容疑者でもあるのだ」

なんだか、矛盾した連中ばっかだな。

「渡瀬さん、それは一理ありますが……」

「レイファよ、言いたい事や疑問はあるだろう。では検証していこうではないか」

〈次回への道標〉

とうとう本質に入ってきたみたいですよ。申し訳なくも傍観者であります私は、ワクワクしてまいりましたわ。お嬢様が大変な事になっているとはわかっているのですけれども、やはりこの気持ちは隠せません。その気持ちを紛らわせるためにも原稿を読みましょう。

容疑者の検証。それはそれぞれに隠された気持ちを検証する事。それによって暴かれる本当の

気持ち。初めて気付く本当の気持ち。気付かされる気持ち。

次【それぞれの本心】

交錯した想いが全てを導く。

ワクワクです。

渡瀬はそれぞれの名前をホワイトボードの書き出した名前の一番上、つまりは俺の名前を指した。

「さて、まずはこいつの動機からだが、直接いちゃもんを言われたという事で最有力候補だ」

渡瀬の言葉にレイファが異論を唱えた。

「ちょっとお待ち下さい。確かに動機という点では直接的なものがあるかもしれませんが、不動さんはあの時わたくしと一緒にいました。ですから、犯人ではありません」

「そうだな。そして次がレイファだ。レイファにも動機がある。なにしろ、愛しの貴方がいちゃもんつけられてたんだからな」

.....なっ、なんだその`愛しの貴男、ってのは。

「それは否定いたしません。確かに、わたくしにも動機はありますわね。とすると、わたくしたちのアリバイも同時になくなってしまいますわね」

「そうなるな。相手をかばっての嘘という事も考えられる。共犯の可能性も浮上する。」

おいおい、そういう展開か？

「そして、この俺だが、親友がいちゃもんつけられていたので、ついカッとして殺ってしまった.....と思われる。そして、俺はあの部屋にいた。故に動機有りでありバイはない」

確かに、理屈ではそうなる。だが.....親友ね.....いいけどさ。

「じゃあ、最後はあたしだね。あたしの動機って、やっぱり最愛のお兄ちゃんが虐められていたっていうのを聞いて、それに怒って殺しちゃった.....そういう事ですか？ ちなみに、あたしも誰かと一緒にいたわけじゃないですからアリバイはありませんね」

「ちょっと待て、歩。最愛のお兄ちゃんってのはなんだ？」

「そのままの意味」

「そんな事はどうでもいい。とにかく全員に動機があってアリバイがないという事だ」

〈次回への道標〉

大変ですわね。このまま事件は迷宮入りでしょうか？ 暗闇に光は射し込むのでしょうか？
とにかく、先を知るためにも原稿を読みます。

行き詰まる推理。それぞれの検証から導き出された本心。それは全て彼を中心としていた。
そう、彼は事件原子核。

次【検証と考察】

物語は彼を中心に回っている。

どうなるんでしょうか.....。

ったく、容疑者が探偵をするなんて、矛盾にも程ってもんがあるだろ。つうか、前代未聞だ。これだけの人間しかいなかったのならともかく、放課後の学校だぞ。人なんていっぱいいるだろうに。なのに、どうして容疑者である俺たちが探偵を……物好きな連中だ。

「ところでだ。俺がレイファの最愛の貴男だとか、親愛なるお兄ちゃんだとか、聞き捨てならんが」

「そんな事を蒸し返すのか。貴様は自ら墓穴を掘ったぞ。さあ、今こそ別島へ向かう時に言いかけた事を述べるのだ」

……ぐむう。墓穴じゃん。自滅じゃん。自爆じゃん。

「そうだよ、お兄ちゃん。はっきりさせなきゃ、レイファさんだって可哀相だよ。ね、レイファさん」

「そうですわね。わたくしとしても、不動さんの本当のお気持ちというものが知りたいですわ」

「そうだぞ。お前の発言でここにいる者全ての人生が左右されるのだ」

なんだ、その仰々しさは。

「ここにいる全員って、レイファと歩はわかるが、お前は……はっ、まだ企んでいたのか」

「何度も言わせるな。俺は諦めたわけではない」

「なんだか、お前の謀略を阻止するためだけに断りたい気分だ」

……はっ！

「言ったね、ついに」

「嬉しいですわ、不動さん。いえ、ダーリン！」

「愚かだな。俺の為だけに断るという事は、その他の障碍はないという事。そして、全てを肯定する事。さて、これで我らの未来は明るくなったぞ。もう、事件なんてどうでもいいじゃんか。光明が見えてきた！」

こうして、事件は事故として解決した？

〈次回への道標〉

さて、いいのでしょうか、これで。このコーナーがあるという事は、まだ続くようなのでしょ
うが……原稿ですわ。

夢幻世界を舞台に繰り広げられる事件。事故として処理されたはずの事件に新展開が！

次【真相を暴け】

まだ事件は終わらない。

こんな風に終わらなくてよかったですわ。なお、これで私の担当も終わりのようです。お疲れさまでした。

「おいおい、こんな風に終わらせていいのか？ いや、よくないだろ。それじゃ、死んだ委員長も浮かばれないだろ」

俺は熱く語った。

さっき、すんごくこっ恥ずかしい事を言ったが、そんな事はすっかり忘れる事にした。

だって、いつまでも過去にこだわっていらんないもんね。俺は未来に生きるのだ。

アイ・リヴ・フューチャー！

「さあ、誰が犯人なんだ。罪を犯す事は悪い事だが、決して完全に悪というわけじゃない。そう、`悪とは罪を犯した者の事ではない、それを知ろうとせぬ者が認めぬ者の事である、と、誰かも言っているだろう」

「誰の言葉だ？」

渡瀬がつっこむ。

「それは……カモン！ 筆者ヴォイス！」

俺は筆者の声を召還した。

『それは我が述べた言葉なり。引用だとしても、我は元を知らぬ』

「という事らしい。わかった？」

俺は誇らしげに胸を張った。

「反則だ」

「反則よね」

「反則ですわね」

非難ごーごーだ。ゴーゴーはお店へだけでいいちゅうに。

でも、仕方ないじゃんかよ。俺は強制されたんだよ。神たる立場にいる者には逆らえないのさ。俺たちは神たる筆者に翻弄されるしかないのさ。

そんな事を呟いたところで、目の前の事件が解決するわけではない。

「さて、今度こそ本格的に事件の真相を突き止めようじゃないか！」

俺は冒頭の時と同じように熱く語った。

俺のハートは萌えている……いや、燃えている。

バーニング・マイ・ハート！

「仕方あるまい。探偵団活動開始！」

〈次回への道標〉

とうとう僕の出番かい。待っていたよ。その前に、筆者さん、復活させてくれてありがとう。感謝の辞を。というわけで、原稿を読ませていただく。

本格的に事件解決に乗り出した探偵団。本部はプレハブ小屋、マッドサイエンティスト研究所。そこで繰り広げられる凄惨な光景。探偵団はこれに打ち勝つ事ができるのか。

次【研究室の罨】

そこは未知の空間なり。

なんだか、僕の研究室を……非道いな……でも、次回は久しぶりに僕の登場だね。楽しみだ。

というわけで、活動が開始された探偵団。その探偵団の本部であるマッドサイエンティスト研究所に俺たちはやって来た。

そう、ここはかの有名なマッドサイエンティスト櫻井の城。魔の巣窟とも呼べる場所なのだ。ここで、マッドサイエンティストは日夜怪しい研究をしているのだ、一学園生でありながら。その目的は世界をその手に収める事。別の言い方をすると、ノーベル賞をゲットするというのが目的のようだ。

「.....また、ここに来る事になろうとは.....」

俺は大きなため息をついた。

「そうだよ。ヤツのお蔭で大変な事になったんだもんね。でも、ヤツのお蔭で、お兄ちゃんとレイファさんの今があるんだよね.....なんだか、恨めばいいのかどうなのか、よくわからないよね.....」

「そうですわね。彼の発明がなければわたくしは不動さんとこれほどまでに親しくなる事はなかったのかもしれないわね。ある意味、彼は愛のキューピッドだったのかもしれないわ」

「認めたくないけど、そうなんだよね.....。さすがキューピッド、あたしの呪いにも屈せず生き延びたんだもんね。お兄ちゃんのクラスの委員長よりも、こいつがお空の綺麗な所.....には行けないだろうけど、逝っちゃう方が世界のためだったのかもしれないですよ」

.....散々な云われようだな。

「とにかく、本部へ行くぞ皆の衆！」

渡瀬が意気揚々とドアを開けた。

——シュゴウウウッ！

不気味な蒸気が噴出した。

「ゲホッゲホッ！」

中から咳き込む声が。

「助かった.....サンキウ」

そこから出てきたのは櫻井だった。

〈次回への道標〉

というわけで、僕の研究室が登場だな。久しぶりの登場で、感極まって涙が出そう。他にも色んなものが出そう。おっと、色んな汁が出る前に原稿を読まねば。リストラはもうヤダあ〜！

作戦会議。これからの捜査方針を決定する。そして登場する新たな発明。その名は.....。

次【超自白液】

これで嘘はつけない。

ひゃっほーっ！ これで世界を我が手に！

「助かったよ……」

涙ながらに訴えてくる。涙の感謝というやつだ。

「たった今、役立つアイテムを発明したのだが、そのあとに別の研究でえらい事になっちまってな……」

訊いてもいないのに説明してくる。

「まあ、これさえあれば事件は即解決間違いなし」

そう言うと、奥に引っ込んで怪しげなビーカーを持ってきた。

「イヤな予感」

「なんだか、イヤな記憶が甦ってきますわ」

顔をしかめる歩とレイファ。まあ、当然だろうな。こいつの怪しげな発明のせいで大変な目にあっただからな。

「今回はどうなんだ？ また、ノーベル賞ものなのか？」

「不動和己よ、そんな事は訊くまでもないだろうが。当然そうに決まっている。僕が発明するのは全てノーベル賞に燦然と輝く発明品なのだ」

そう言って、高々とビーカーを掲げる。

「……………なんだか、初めて来たんだが、すごい所だな。それに、初めてじっくりと話を聞いたが、噂に違わない人物のようだな、マッドサイエンティスト櫻井というのは。まさに、レジェンドだな」

こっそりと耳打ちする渡瀬。

あの渡瀬がここまで言うとは……さすがだ、マッドサイエンティスト。

「で、今度はなにを発明したんだ？」

とりあえず、お約束だろうから訊いてやる。

「そう、今回発明したものは、前回の超電導液に続く超シリーズ第2弾！ 超自白液！」

さらに高々とビーカーを掲げる。

つうか、シリーズってなんだ、シリーズって。

「これで、人は隠し事ができない。全て白日の下に曝されてしまうのだ」

やっぱ、マッドな発明だな。

〈次回への道標〉

僕の発明をけなすとはどういう領分だ。まあ、とにかく原稿を読もう。

完成した新発明、超自白液。その効果を試そうと実験を試みる。

次【人体実験】

誰が生け贄となるか。

失礼だな。プンブン。

「というわけで、誰が実験台になる？」

はあ……？

俺は我が耳を疑った。

「拒否！」

「拒否させていただきます」

「イヤだ！」

歩、レイファ……そして俺は即答で拒否の言葉を告げた。

「……………」

出遅れた渡瀬。

まあ、やっちゃったんだろうな。実体験がないからな。こいつのデンジャラスさは心からは理解できていないのだろう。

「……………」

啞然とする渡瀬。そこに、とどめとばかりに櫻井が、

「じゃあ、渡瀬章一郎にやってもらうとするか」

嬉々とした表情でその事実を告げる。

「……イヤだ」

消えそうな声で告げるが、櫻井は聞いていない。

「というわけで、飲んでもらおうか。つうか、飲めっ！」

と、無理矢理飲ませる。

グッバイ、渡瀬。

「オヴァッ！」

渡瀬は変な声を出してその液を飲まされた。

っていうか、飲んで大丈夫なのか？ 死なないんだよな。それは少し心配だ。

やがて、渡瀬はそれを飲み干した。つうか、飲み干さされた。

「ぷはあ……！」

「どうだ、渡瀬章一郎。君はもう真実しか喋れない。訊かれた事象には嘘はつけないのだ！」

櫻井は高らかに声を張り上げた。

「さて、この液が成功かどうか、試させてもらうぞ」

〈次回への道標〉

ついに、僕の本領発揮だな。発明品の試験だ！ というわけで、原稿。

ついに試される超自白液。しかし……。そこには見落としがあった。

次【櫻井の見落とし】

これは致命的だった。

おいおい、どうなるんだよ、これは.....なにさ、見落として。を~い！

「なあ、渡瀬。大丈夫か？」

俺は心配になって訊いてみた。あんな怪しいものを飲んだんだ。身体が異変を訴えてもおかしくない。つうか、訴えてこないと変だ。異常だ。

「ああ、なんともないようだが」

「失礼な。僕が作った薬品だぞ、安全はJISマーク保証だ！」

.....それって、違うだろ。JISってそんなもんじゃないだろ。

「さて、渡瀬章一郎。隠し事はもうできない。さあ、全てを吐くんだ。あの事件の時、渡瀬章一郎は現場にいた。そうだな」

「ああ、確かにいた」

渡瀬は淡々と答える。

「なあ、これって、薬品の効果なのか？」

「黙れ、不動和己。さて、渡瀬章一郎に質問だ。嘘はつけないからな。そこで渡瀬章一郎は沢田健太郎が落ちた瞬間を見たな？」

「ああ、それがどうした？」

渡瀬はしれっと答えた。.....って、おい。

「渡瀬、見ていたなら真相を知ってるんじゃないのか？」

「ああ、確かに見ていた。だが.....詳しくは見ていない。委員長が落ちた瞬間を見ただけだからな」

「じゃあ、自殺か殺人かくらいわかるだろ。その時、他に人はいたのか？」

「ああ、大勢いた。大勢の人間が目撃者だ。あの時、あの場にいた人間ほとんどが最初からあそこ」

おいおい、そんなの初耳だぞ。じゃあ、誰かが突き落としたのかもしれないじゃないかよ。だいたい、そんな大勢が見ている所で自殺なんて、普通は考えられない。だとすると、これは殺人という事になってしまう.....。

「でも、これって本当に発明の効果ですか？ 元々渡瀬さんって嘘はつきませんよね？」

そんな空気にレイファの鋭いツッコミが炸裂した。

〈次回への道標〉

のーん！ 確かにそうだった。僕は愚かなミスを犯してしまった。渡瀬章一郎という人間は、周りの目を全くにせず本音だけで生きている人類だった。.....悔しい。悔しすぎる。これをバネに原稿読んでやるさ。意味わかんねえけどな。

レイファのツッコミで一瞬の間に空気が変わった。それはまさに、そこに吹き抜けた一陣の風。

次【事件は闇に】

解決の糸口なし。

僕の意味はなに？ なんだったの？

「確かにレイファの言う通りだ。俺は嘘は
だいつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつきらいな人種だ。嘘はつか
ない事を誇りにしている。誰かがお前のそれは埃だとか言ったとしても、俺はそれを誇りとして
生きていくだろう！」

確かに、こいつが嘘をつくのは聞いた事がない。突拍子もない事を言いはするが、嘘だけは言
わなかった。

……って、よくよく考えると今までこいつが発言していた事は本当の事だとか考えると、それ
はそれでイヤなヤツだな。心にしまう事も覚えた方がいいのではないだろうか。

嘘をつかない事と、思った事をペラペラと言う事は似ているようで全然違うものなのだから。
「……………うわああああんっ！」

レイファからその事実を聞かされた櫻井は泣きながら研究室を出ていった。

かわいそう可哀相なマッドサイエンティストだな。哀れなり櫻井純平。

「ねえ、じゃあさ、この薬品ってなんだったの？」

歩の冷静なツッコミが炸裂する。

「さあ……？」

俺にもわからない。

「とにかく、全員集合のネタだったんじゃないのか？」

渡瀬が呟く。

「やはり、櫻井さんから失態の罪は消えませんが、可哀相な気もしますが、自業自得ですから
……情状酌量の余地もありませんわ」

「そうよね。なんたって、あたしの呪いをも耐えたんですよ、あの人。それだけで充分と慈悲が
与えられている気がしますけどね」

「そうですわね。最後に登場できたんですから、彼とて本望ではないでしょうか」

散々な言われようだな、今さらだけど。

「というわけで、事件は自殺として処理してしまおうか」

〈次回への道標〉

うわああああんっ！ もう、泣き叫んでやる。泣いて泣いて……この悔しさをバネに、次回
作では最高のお役立ち発明をしてやるんだ！ そうさ、こんな事で諦めてしまっってはいけない。
僕には未来があるのだから。その未来を切り開くためにも、原稿を読むぞ！

事件は有耶無耶のまま処理されようとしている。事実はその中には見えない。

次【事実は闇へ……】

それは嘘か真か。

うわああああんっ！

おいおい、処理してしまおうかって……いいのかよ、そんなんで。

「なあ、渡瀬よ……」

「不動。お前の言いたい事は重々承知している。わかっている。お前はこう言いたいはずだ——そんな事でいいのか？ 処理してしまおうって、そんな適当な事でいいのか？ ——どうだ？ おおむね当たっているとは思いますが。もちろん、一言一句違わずというのは、さすがの俺でも無理だ。そこまで完璧を望まれても困る。それはすでに、読心術の域だ。俺はそのような特殊技能を持ってはいないのでな、そんな事は無理だ。まあ、常識で考えればすぐにわかってもらえるだろうしな。ならばどうして俺がお前の言いたい事がわかったのかだが、そんなものは俺とお前の仲ならすぐにわかる。まあ、お前の今までの言動や行動を考えればすぐにわかるがな。それに加え、俺はお前の親友だ。マイライフの為の出費者だ。そのような方のハートを理解できなくなりがマイライフの実現だろうか。そのような事もできない者にマイライフの実現は到底できるはずがない。というわけで、俺はマイライフの実現という餌はあれども、お前のハートを理解した。あとは、お前はそれにどう応えてくれるかだ。期待しているぞ、我が心の友よ」

……最初はいい話っぽかったのにな……最後の結論はこれか。やっぱりこいつの頭の中はこればっかか。

それにしても、長台詞のわりに、内容のない文章だな。

「まあ、渡瀬の言う通りだ。ちなみに、最後の方は割愛させていただき、なかった事にさせてもらうぞ」

「ふざけるなっ！ 最後の方こそ重要なのだぞ。それがわからぬか」

「最後こそいらないんだよ」

「マイライフの実現は……おい」

こうして有耶無耶に終わろうとしている。

〈次回への道標〉

最後だというのに、僕の出番はもうないんだね。だけど、僕にはここがある。ここが僕の安住の地なんだね。だから、原稿は誠意を込めて読むよ。

不可思議な事件は終わろうとしている。そして、事件は静かに幕を下ろしていく……。

次【事件を振り返って】

やがて、人々の記憶からも消えていく……。

だけど、僕は永遠に不滅です！

「とにかく、事件は終わったって事なんだよね、お兄ちゃん」

仕切り直すように歩が発言した。

「あ、ああ。そうなるみたいだな……。でもさ、これでいいのか？ 本当にいいのか？」

だが、相変わらず俺は疑問が拭えない。

「もう、いいんじゃないのですの？ 故人を悪く言うのもなんですが、仕方のない事ではないでしょうか」

……。いや、仕方ないって……。いいのかよ、それで。

「不動、これはもう終わった事だ。スッキリ、サッパリ、しゃっきり……。気分一新、心機一転だ」

謎の景気づけに俺はため息をついた。

「ところでだ、渡瀬」

「なんだ、不動」

「実際のところ、瞬間は見ていないのか？」

俺が訊くと、渡瀬は大きくため息をついて、

「まだそれを言うのか。お前は過去を蒸し返してどうするというのだ。過ぎた事は過ぎた事として認知できないのか？ 過去は変える事ができない。故に醜くあり、美しくもある、と、誰かも言っているだろうに」

誰だ？ 誰の言葉だ？

「渡瀬さん、それって誰の言葉？ ねえ、レイファさんは知ってますか？」

「申し訳ありません、歩さん。わたくしも聞いた事がありません。渡瀬さん、わたくしからもお訊きしますわ。どなたの言葉のですの？」

どうやら二人も知らないようだ。という事は、本当に誰の言葉だ？

「そうか……。誰も知らないのか……。遺憾だ。まことに遺憾だ。まあ、いいだろう。そこまで言うのなら教えてやろう。この言葉は、ある偉大なる若者が述べた言葉なのだ。そう、その言葉を述べた者とは、今君たちの前にいる渡瀬章一郎その人なのだ！」

拳を高々と天に挙げ叫ぶ渡瀬。

「なんだ、つまんない」

〈次回への道標〉

いよいよラストを迎えるようですね。といっても、今回はラスト1。もうちょっとだけお付き合いを。というわけで、原稿！

事件は何事もなく終結していく。事実は誰も知らない。いや、知る者はただ本人のみ。それこそが事件の真相である。

次【闇の中の光明】

ついに光が射し込む。

予告も終わりっぽいものになってきましたね。

心底残念そうな歩の声。まあ、期待したのにそれじゃあな。

「なんだ、その残念そうな声は」

「つまんない。おもしろくない。さいてー！」

「……くっ」

非道い言われようだな、渡瀬は。

「まあ、わたくしも期待しましたのに、それではオチとしても最低ですわね。わたくしも歩さんの意見に全面的に賛成したいと思います」

……うっ、これは強力だな。この協力タッグは強力だな。

「うわああああんっ！」

渡瀬は泣きながら走っていった。

「おいおい、櫻井もそうだったけどよ、泣く事はないだろ、泣く事は」

「なに、お兄ちゃん。泣かせて欲しいの？」

「おい、歩。俺がいつそんな事を言った？ ええ、何時……」

「お兄ちゃん、それ以上言うと、子どもだよ、本当に。しかも、さいてー！」

……まあ、歩の言う通りだな。

「そうですね。不動さんともあろうお方が、わたくしの夫となられるお方がそのような事を仰っていては、わたくしとしても……おおよっ……ですわ」

……おいおい、話はそこまで進んでるのかよ。しかも、決定事項として。

「そうだよ、紫藤グループの次期会長の座としては、そんなくだらない事を言っているようじゃダメだもんね。でも安心して、レイファさん。お兄ちゃんは、あたしがビシバシと鍛えて更正させてみせるから。次に会う時には、立派な会長として、レイファさんの前に現れるんだから」

「楽しみですわね、それは。待ってますわよ、不動さん」

ったく……イヤな展開だ。

……………ちゃん。

あれ？ 声が聞こえる。

〈次回への道標〉

いよいよラストだな。でもさ、前半の予告を担当していた新見さんって人も言ってたけど、このオチはいいのか？ いいんだろうか、疑問だ。とりあえず、原稿……と言いたいのですが、最終回の予告文はないとの事です。書くと面白くないからというのが理由のようですが、書かなければ面白いのかというのが疑問です。では、文なしでタイトルだけ。

次【真実の朝】

朝陽はいつもと同じように昇る。

これでおしまいのようです。

.....やん。

.....ちゃん。

.....いちゃん。

.....にいちゃん。

.....おにいちゃん。

俺は声に導かれるように目を開けた。

「やっと起きた。もう、いつまで寝てるのよ、お兄ちゃんはっ！」

歩はその手に持っている音楽記号の公式ビジュアルファンブックを再びかざした.....って、もしかして.....。

「この本、嘘だね。これで妹に起こしてもらえば.....って、お兄ちゃんったらもう一度眠っちゃうんだもん。.....って、本当に遅刻しちゃうよ。早くしてよ、お兄ちゃん」

「あ、ああ.....」

俺は痛む頭をさすりながら起きあがった。

「なあ、つかぬ事を訊くが、学校で死人が出たりしてないよな」

「はあ？ なに言ってんの？ もしかして、どっかに飛んじゃった？ そんなわけないじゃない。そんな事あったら、休校だよ」

「そう.....だよな」

という事は、あれは全部夢だったのか？

をいをい、これってタブー的オチのアレなのか？ マジで？ 本当に？

——夢オチ！

「お兄ちゃん、もう一回落とすよ」

歩が手にしている例のものを振りかざした。

「ま、待て。すぐに支度するから、早まるな」

俺は慌てて着替え始めた。

「お兄ちゃん、レディーの前で着替えないでよっ！」

「オヴァッ！」

歩が手の本を投げてきた。

「ほら、先に行っちゃうからね」

「すぐに行く」

こうして、俺の夢の物語は終わったようだ。現実には、平和ないつもの世界だった。

〈終了対談〉

歩「というわけで、このシリーズも一段落したみたいだね」

和己「ああ、どうやら俺がレイファに告白するまでがそうだったらしいな」

渡瀬「現実ではまだなのだがな。まあ、お前が自分の気持ちに気づけたのだ、それでいいじゃないか」

麗華「そうですね。わたくしは夢の中でも嬉しかったですわ」

渡瀬「これで、俺のマイライフも実現だしな」

歩「そうね、これで社交界デビューも決定だもんね」

櫻井「それはそうと、実はこれは第1話だったらしいのだ」

和己「おわっ、お前はどこから出てきた」

櫻井「気にするな。それでだ。僕が極秘ルートから入手した資料によると、この話はもう少し長く、もっと真面目な話になるはずだったようなのだ。そして、その記念すべき前半部は『あたしはあなた？ あなたはあたし？』として発表されたものの真面目ヴァージョンらしいのだ。すなわち、これで事実上完結というわけだ」

渡瀬「すごいな。その情報はどこから……」

櫻井「極秘だ」

渡瀬「是非とも裏新聞部〈別名、非公式（以下略）〉でも作らないか？」

櫻井「まあ、善処しよう。というか、むしろ作ろう！」

和己「さて、このような二人はほっておいて、とにかく間に話が挟まりましたが、これで一応の終結みたいです。長らくの間ありがとうございました」

歩「でも、ラストが夢オチっていうのもね……」

麗華「ですが、櫻井さんから奪いました資料によりますと、それは最初からそうになっていたようですわ」

歩「なんですって。なに考えてんの、筆者はっ！」

麗華「資料によりますと、`あえてタブーを試みたくて……、とありますわ」

歩「……………ダメだ」

和己「さて、これではキリがなくなってきましたので、この辺で終了したいと思います。いつの日かきっと復活するでしょう」

麗華「予定は未定だそうですわ」

和己「……………とにかく、ありがとうございました」

歩「ありがとうございました」

麗華「どうも、ありがとうございました」

渡瀬「おっと、最後の挨拶だな。サンキウ！」

櫻井「あまり活躍できなかった気もするけど……ありがと」

和己「というわけで、これにて終了です！」

<最後に番外的な話を……> 【ついに出現！ 紫藤家の樹海】

「ようこそですわ、不動さんに歩さん。とりあえず、門の中に入ってお待ち下さい。迷われるといけませんので、じっとしていて下さいましね」

紫藤家に招待された俺たちは、巨大な紫藤家の門の前に立っていた。インターフォンのモニターにはレイファが映っている。

改めて見上げる。でかい。でかすぎる。ホントにすごい……。

ーブィィン！

鈍いモーター音で門が開く。やっば、このでかさは電動じゃないとな。素手で開けようなんて、普通の人間にやできん。これを見てしまっちは、確かに最初家に来た時、手動で門を開ける事を不思議がったのにも納得がいく。門は電動という固定観念のようなものがあったのだろう。っていうか、これが普通なのか？

そして……これが……。

俺の目に飛び込んできたもの……それは森だった。これが、噂の樹海か……。以前に歩が遭難した……。

隣を見ると歩が震えていた。トラウマになってるのか。まあ、そうだろうな。

「お兄ちゃん、ここ、イヤだよ……」

あの日、歩から聞かされた話は衝撃的だった。作り話だとしか思えないほどだった。だが、実際にこの目で見ると、信じるしかないだろうな。

実際に見た事はないし入った事もないが、富士の樹海ってこんなものなのだろうか？ 恐ろしいものだ。こんな所、一人で歩けばそりゃ迷うだろ。あいにく俺に自殺願望はない。待つに決まっているだろう。だいたい、歩もこんなだし。

歩は俺の服にしがみついて放そうとしない。あの歩も乙女の繊細な心を持っていたんだな……っていうか、ここがすごすぎるのか。

しばらく待っていると、レイファがやってきた。……って、徒歩かよ。

「お待たせしましたわ」

にこやかな笑顔で言う。

「なあ、普通さ、車とかで来ないか？」

「申し訳ありません。樹海は車禁止なのですわ。なので、ここからは徒歩になります。ご容赦下さい。では、行きましょうか」

なんだか、すごいな……。なにがって、全部。

「早く行こう」

俺にしがみついている歩が消えそうな声で言う。

「ああ」

俺たちはレイファの案内で樹海を無事に抜ける事ができた。

本当に、案内がいなけりゃ迷うぞ、これは。樹海の中にいる時は、本当に方向感覚がなかった

からな。樹に覆われて空が見にくいし、目標物もないし……厄介な場所だった。

そのあとも何度か紫藤家に招かれたが、歩はずっと樹海にいる間は震えていた。まあ、屋敷に入ればケロツとしてるんだが。

紫藤家……他にもなにかありそうだな。未知の領域——ミステリック・レイヤーだ。

R - 3 夢幻世界の難事件

<http://p.booklog.jp/book/34587>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34587>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34587>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.